

京都大学	博士（文学）	氏名	馬淵 一輝
論文題目	後漢・魏晉鏡の成立と展開		
（論文内容の要旨） 本論文は、後漢・魏晉時代の銅鏡生産の実態を明らかにすることを目的とする。 後漢・魏晉時代は、長きにわたり中華世界を統治してきた漢王朝に陰りが見えはじめてから、異民族の侵入によって未曾有の混乱期が続いた五胡十六国時代の前代までにあたり、中国史上の転換期に位置づけられる。この時期に、日常生活用・儀礼用・副葬用に製作された様々な器物の一つとして、銅鏡があげられる。漢代に製作された鏡は、銘文から前漢以来、官営の「尚方」工房が主導して銅鏡を製作したと考えられてきたが、後漢以降になると、製作者名や製作地を鋳出した鏡が多数現れ、製作者（集団）・製作地が複雑化すると考えられている。後漢末の動乱期における鏡作りの様相はあまり分かっていないが、三国時代になると魏と呉で鏡生産が復興する。しかし、漢鏡と比べると製作技術が粗く、紋様も単なる模倣に過ぎず、ほとんどは質的に劣った製品であった。こうした変化は、当時のものづくりの一端を担う銅鏡における画期として評価できるだろうが、製作者（集団）に具体的にどのような変化が起き、それが製品にどのように反映されたのか、といった問題については、未解明な課題を多く残している。 以上の問題意識に基づき、本論文では、後漢・魏・西晋時代に作られた鏡の製作時期・地域を明らかにした。具体的には、徐州（華北東部）地域で作られた各鏡式を検討し、廣漢・華西・江南など異なる地域・集団で作られた鏡の影響関係を念頭に置きつつ、鏡の製作者・集団の実態を検討した。また、魏晉時代に華北で作られた製品を検討し、後漢から魏晉への鋳鏡技術の変化についても考察した。 本論文は目的・問題点などをまとめた序章、対象資料を分析した1章～7章、鏡の製作者・集団（工人・工房）と流通に言及した終章によって構成されている。 序章「古代日中関係史と鏡研究」では、画紋帯神獣鏡と三角縁神獣鏡が近畿中央部に集中することが、日本列島における王権の成立に結びつけて理解されてきた経緯にふれた。そして近年、日中関係を反映する器物として、徐州地域で製作されたと考えられる鏡が注目を集めており、鏡式ごとの細かな研究が進展していることを示した。一方、製作者・集団（工人・工房）に基づいた鏡の研究が進み、単一の製作主体が複数の鏡式を製作していることも判明している。こうした研究史に基づき、製作主体と鏡式間の影響関係を念頭に置いて鏡を研究することの重要性を主張した。 第1章「上方工房の作鏡活動」では、上方作系獣帯鏡と上方銘をもつ鏡を検討し、上方工房の変遷と他鏡式の影響関係を論じた。上方作系獣帯鏡は日本列島での特徴的			

な分布により、古墳時代研究で重視されてきた鏡式である。しかし本稿では、上方銘をもつ全ての鏡式を対象とした上で、製作主体に着目して分析し、上方銘をもつ鏡の変遷を明らかにすることを目的とした。上方作系獣帯鏡については、銘文型式にもとづいて系列を設定し、獣像表現もふまえて、画像鏡と神獣鏡の影響を指摘した。上方作盤龍鏡・画像鏡は、上方作系獣帯鏡との接点を見出せない。しかし、一部の上方作神獣鏡には共通性を認めた。そして、これらの鏡に外部から移入した神獣鏡製作工人の影響が認められることと、それらの製作時期が遅れる可能性を指摘した。

第2章「斜縁神獣鏡の系譜」では、上方作系獣帯鏡の延長上に位置づけられる斜縁神獣鏡を検討し、年代的な位置づけをおこなった。具体的には、断面形状の検討をおこない、さらにそのほかの属性との関係を検討することにより、研究史で指摘されてきた鏡式内での二つのグループの特徴を明確にした。次に、両グループの銘文の字形を比較して、同じ漢字に異なる字形が用いられたことを示した。そして、二つのグループが製作者（集団）の違いを反映していると主張した。また本鏡式は、後漢鏡か魏鏡か判断が分かれているが、後漢後期鏡のなかでも古い上方作系獣帯鏡、および魏鏡に位置づけられる求心式神獣鏡とそれぞれ字形が共通するため、製作時期が近接する可能性があり、既存の編年観を修正する必要があることに言及した。

第3章「斜縁同向式神獣鏡の系譜」では、神獣表現の違いから、斜縁同向式神獣鏡に三つの製作系統が存在することを論じた。これまで斜縁神獣鏡や三角縁神獣鏡に含まれることが多かった本鏡式を、画像鏡と神獣鏡を折衷した中間鏡式と評価する。そして、三つの製作系統が認められる背景には、鏡工人である「袁氏」と「劉氏」の存在を想定することができる。

第4章「袁氏工房の作鏡活動」では、袁氏作系画像鏡を中心に検討した。外区紋様・図像およびその他の属性との組合せから、本鏡式を三型式に分類・編年し、従来の変遷観を追認した。さらに、「銓氏」や「田氏」などの工人が、「袁氏」と同様の意匠をもった鏡を製作していることを指摘した。そして、それぞれの工人が袁氏作系画像鏡のどの段階に活動していたのかを検討することで、「袁氏」を代表とする工房の実態を復元的に提示した。

第5章「列島出土神獣鏡の系譜」では、徐州で一人の工人（工房）により作られた可能性が高い神獣鏡を中心に検討した。まず、劉氏銘をもつ鏡全体を対象にして検討をおこない、「劉氏」銘鏡の中に、図像や銘文などの特徴において酷似する例を見出した。こうした「劉氏」銘鏡の特徴を別鏡群と比較し、「九子」など四川・華西地域の鏡製作者から影響を受けたと想定した。次に、神獣表現が酷似する「吾作」画紋帯環状乳神獣鏡の一群をとりあげ、これらの鏡群が、外区の半截菱雲紋が共通する求心式神獣鏡の製作時期に近接する可能性が高いことを指摘した。

第6章「獣首鏡の系譜」では、獣首鏡の紋様に注目して、その編年案を提示し、製

作系統の違いを論じた。まず、紀年銘鏡と出土墓葬の検討から、紋様の変化を検証した。これまで、獣首鏡は後漢代の廣漢郡で製作されたと考えられてきた。しかし、それら以外にも、主紋様・銘文・製作技術などが異なる一群が存在し、これらは、長安に製作地を移した集団によって作られたと論証した。また、魏の年号である「甘露五年」銘獣首鏡を観察して製作技術の痕跡を見出し、異なる鏡式の魏鏡とも比較することで、鑄型（もしくは原型）の一部を改変・補修して量産を志向する、魏の官営工房の鑄鏡技術に言及した。

第7章「双頭龍紋鏡の系譜と魏晉社会」では、後漢～魏晉時代の双頭龍紋鏡を検討し、九品官人法によって貴族制が進んだ当時の時代背景と関連付けた。製作時期の新しい双頭龍紋鏡を後漢末か西晋かどちらに位置づけるかは、日中の研究者で見解が割れていたが、出土墓葬の様相をほかの魏晉鏡と比較することで、補正案を提示した。そして、西晋代に作られた双頭龍紋鏡の出土墓葬をふまえて、官僚の格差が拡大したことを反映して、立身出世を願った双頭龍紋鏡（別名、位至三公鏡（位は三公に至らん））が流行したと結論づけた。また、本鏡式が広域に分布する現象と連作鏡の状況を示す製作技術を検討し、大型魏晉鏡とは製作・流通原理が異なることを論じた。

最後に終章「鏡工人・工房と三角縁神獣鏡の特質」では、各章の検討を踏まえ、後漢から魏晉にかけて、製作技術のみならず、製作主体である工人・工房の実態も変化していたことを示し、その背景について論じた。具体的には、後漢時代は一人の工人や二桁未満の工人が所属する工房によって小規模な生産がおこなわれていたが、魏晉時代は「尚方」などの大規模な工房によって同范（・同型）技術を用いて、大量生産がおこなわれていたと述べた。そして本論文で得られた銅鏡の製作地の視点から日本列島出土鏡を俯瞰し、近畿中央部とそれ以外の地域では、前者が徐州、後者がそれ以外の地域で作られた鏡が出土することに言及した。

本論文では、さまざまな鏡式を網羅的に扱い、各章で他鏡式の影響関係を意識したことによって、後漢・魏晉鏡の有機的な関連づけが可能になったと考える。また、鏡の分類と製作主体を紐付けることによって、具体的な工人・工房の様相を明らかにすることができ、当時の鏡生産の実態を明らかにするという、本論文の目的をある程度まで達成できた。今後は、日本での出土状況の検討をより緻密に進めると共に、日中交流を反映する鏡以外の器物にも目を向けて研究を進めていきたい。

(論文審査の結果の要旨)

漢王朝が滅亡して魏・呉・蜀が覇を争った紀元後2・3世紀は、朝鮮半島や日本列島における古代国家形成を考える上でも重要な時期である。当時の社会状況を考古学的に検討するために日本考古学で注目されてきたのが、日本列島各地の古墳から出土した前漢～南北朝の銅鏡である。これまでの研究によって、鏡式ごとに、日本列島を中心とする出土例の分布の特徴を見出し、それが当時の地域間関係の変化を反映しているとみなして、歴史的な解釈が試みられてきた。また、各鏡式の時空的位置づけについての研究も進められてきた。しかし、中国における各銅鏡の製作地や製作者、および製作技術・生産体制についての研究については、検討の余地が少なからず残されている。

こうした研究の現状に基づき、本論文では、後漢～魏晋代に中国各地で製作された銅鏡のうち、朝鮮半島や日本列島との関係が深い鏡式を検討対象とした。これまでの研究により、対象となる銅鏡の多くは、徐州をはじめとする華北東部地域で製作されたと考えられている。本論文では、これらの銅鏡について、銘文や鏡の文様などの諸属性の検討を通して、系統や時間的変遷を明らかにすると共に、周辺地域で製作された銅鏡の影響を念頭におきつつ、銅鏡を製作した工人・工房の実態を明らかにすることをめざした。

具体的には、銘文を通して製作主体が推定できる、いわゆる「徐州系」鏡群（上方作系獣帯鏡をはじめとする、「上方」銘をもつ銅鏡群（第1章）、「袁氏」系画像鏡（第4章）、「劉氏」銘神獣鏡（第5章）など）、「上方」・「吾作」などの銘をもつ「徐州系」の神獣鏡群（斜縁神獣鏡（第2章）、斜縁同向式神獣鏡（第3章）、「吾作」画紋帯神獣鏡半截菱雲紋類（第5章））、神獣鏡の故地である廣漢・華西系鏡群（獣首鏡（第6章）、双頭龍紋鏡（第7章））が検討された。

それぞれの章においては、各鏡式における銘文の内容・銘文の字形・鏡の断面形状・神獣像表現・外区紋様などの諸属性を分類し、それらの相関関係が総合的に検討された。こうした分析の結果、鏡式内における複数の系統の存在を指摘し、系統ごとの変遷についても大まかな見通しがたてられたことが、本論文の成果の一つである。

また、上記のような検討と、銘文にみられる工人・工房名との対応をみていく中で、後漢代における「徐州系」銅鏡を製作した工人・工房の諸様相の一端を明らかにしたことも、成果の一つとしてあげられよう。つまり、上方銘をもつ画像鏡のように、同じ銘文をもちながら、それ以外の要素にはまとまりがなく、ある時期・地域に複数の工人・工房が製作に関わったと考えられる例がある。また、上方系獣帯鏡のように、一つの工房に所属する複数の工人が製作に関わったと考えられる例もある。さらに、諸属性の共通性が強く、一人の工人によって製作・運営されたと推定される工房の存在も指摘された。

さらに、獣首鏡と双頭龍紋鏡という、後漢後期～魏晋期に製作された銅鏡の変遷・系統を整理し、その流通の様相が整理されたことも成果である。製作技術としては、一鑄一範を基本とする後漢鏡に対して、魏晋鏡では、同形鏡・同範鏡を用いる例が確認できることが指摘された。また、中華圏内における流通・消費において、鏡の材質や大きさによる質的格差が存在する可能性が指摘された。

このように、本論文は、各鏡式に対する具体的な検討をもとに、後漢後期～魏晋代における、徐州地域における銅鏡生産の諸相を整理することができた点に、学術的な意義を認めることができよう。こうした研究成果は、中国における手工業生産の変化の実相や、徐州系鏡群が、どのようにして朝鮮半島・日本列島に流通したかを考える上で、少なからず貢献することが期待できる。

ただ、口頭試問においては、今後、本論文の研究成果をさらに発展させるための問題点・課題が、いくつか指摘された。まず、鏡式ごとに分析手法が異なっていることもあって、取り上げられた鏡式全体の編年や総合的な評価が不十分である、との指摘があった。また、当時の中国で製作された他の鏡式との関係を示すべきであった、との指摘もあった。

一方、今回の研究成果を踏まえて、朝鮮半島・日本列島で出土している徐州系銅鏡をどのように再評価するのかについての方向性を示すべきではないか、との意見もだされた。中でも、その製作地・製作者について、日本考古学で数多くの議論が続けられてきた三角縁神獣鏡については、今回の検討成果を元にした再検討がなされるべきだとの指摘があった。

こうした今後の課題については、論者も十分に認識している。本論文を足がかりとして、指摘された課題に取り組み、2・3世紀における東アジア世界の様相を考古学的にさらに解明していくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年8月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。